

# 地球を 読む

か、それとも研究の場なのか。本稿では、「両立を目指す」という美しい言葉に逃げ込まず、大学の教育機関としての重要性について論じたい。

筆者が大学生の時は、教授陣から貴重な助言をいた

だき、先輩・同輩との対論にも刺激を受けた。だが、教育を受けたという実感は乏しい。だからだろうか。企業や社会の側には、「大

このため、日本は大学院に進む学生の比率が低い。学部卒では海外のグローバル企業に就職したくても、採用のスタートラインにも

学校を超える魅力を提示できていないと言えよう。先端的な優れた研究者であつても、学生教育という面では能力の乏しい人も散見される。これでは学生の学習意欲は減退する。

実習とする。教授には学生の議論をリードし、深化させる役割を期待したい。何百人もの学生を「階段教室」に集めて、一方通行で講義するような手法は改めるべきだ。記憶力を重視した高校までの詰め込み教育は、改革が叫ばれて久しい。この手法を、大学で再現するような愚は避けなければならぬ。

大学改革は喫緊の課題と言われ続けながら、遅々と進んでいない。

大学経営者の関心はもっぱら、少子化で学生数が減る中でどう生き残るのか、どう運営資金を確保するのかといった点にある。事情はわかるが、より重要なのは、大学を日本の社会、経済、国民生活に貢献できる組織とすることだ。

大学とは、教育の場なの



渡辺 博史

国際通貨研究所  
理事長

## 大学改革

### 教育の機能強化必要

せながら研修を受けさせた「い」との考えが根強い。

一方、大学側も教育内容に対する企業などの不満を

解説能力の高い教授を厳選し、彼らの講義をビデオ収録し、全国の学生に視聴させるのも一案ではないだろうか。夜間を含む空いた時間を受講できる。各大学で

日中の講義以外にビデオ講義を視聴せよというのは酷だと思ふ学生もいるだろう。だが、大学入学はゴールではなく学問のスタートだ。意欲を持って取り組んでもらいたい。

たたとえば5年かけて博士号を取得して就職しても、給料で優遇されない状況が見られる。学生の「習得内容」が処遇に上乘せされないのだ。

「実業教育」に徹している専門

の講義は、ビデオ講義を踏まえたグループ討論や実技

まえたグループ討論や実技

△2面に続く▽

# 地球を 読む

1面の続き

渡辺博史氏 1949年生  
まれ。財務省国際局長、財務  
官、国際協力銀行総裁などを  
経て2016年10月から現  
職。経済に関する著作多数。

大学の専門に理系と文系の区分があり、学部が細かく分かれている現状も見直す余地があろう。

戦後日本が伸ばすべき産業分野を定め、官民そろって「追いつけ追い越せ」と努力している時代は、学生が4年間に学ぶ範囲を明確かつ専門的に絞り込むことに一定の意義があった。ただし、こうした細分化は、おのずと学問自体の発達・展開を阻害する面がある。さらには学生が知的関心を抱く範囲を狭小化させることにもつながる。

現在では、日本の経済と社会がかなりの程度、成長・成熟し、同時に世界の変化

が加速している時代だ。かつてと同じやり方は通用しないだろう。入学時に選んだ学問が卒業時にはあまり役に立たないという事態すら起こりうる。

## 文理横断 幅広い学びを

そこで、今後は学部単位に細分化した入学選考をやめ、総員数の枠内で入学した学生が自ら、入学後に関心を持つ分野を学べる仕組みを導入してはどうか。

あらかじめ学部ごとの定員を決めないと、教授陣の構成やバランスを策定するのが困難だという声もあろう。しかし、問題に対処する方策はある。地理的に近

かったり、得意分野が共通していたりする複数の大学がネットワークを作り、今まで以上に授業単位の相互認証などを行えば解決できるのではないか。

場合によっては、学生が1〜2年ごとに転居しながらいくつかの大学に通い、トータルで所要の単位を取得すれば学位を授与する文理横断的・異分野融合的な

「文系」を選択した生徒の理由の一つ、あるいは最大の理由かもしれないと思われるのが、「私は数学が苦手だから」というものである。高校の数学課程で何をどこまで教えるのかにもよるが、少なくとも多くの生徒が数学を忌避して、自ら進路を狭めてしまう状況は容認できない。論理的な思考能力を身につける数学の重要性は今も昔も変わらない。

全ての大学が国・数・英と、その他2科目を自然科・学、社会科学、人文科学から選択するという構成で受験することが望ましい。総合点で合格した場合でも、基本科目の国・数・英でそれぞれ所要の点数に達しなかった学生には、入学後に能力向上のための「修練コース」を受講させる必要がある。

20歳前後という貴重な時期を大学という「学び場」で過ごす以上、まず何に時間とエネルギーを費やすべきなのか。大学側は自信をもって学生たちに提示しなければならぬ。

「専門外の人間が何を言うか」と思われるかもしれないが、議論を深める端緒となれば幸いである。

英文は金曜日のジャパン・ニースに掲載予定です

ており、基礎的な授業を受けてながら各学生がパッケージを選べた。4年間で数学と文化人類学、つまり理系と文系の二つの学士号をとったつわものもいた。

そもそも文系、理系という「区分」に意味はあるのだろうか。

教壇に立った経験から強く思うのは、文章を紡ぐ力をおろそかにしてはいけないということだ。読んでも意味が取れない日本語や、ほとんど判じ物のような英語しか書けない学生を卒業させてはいけない。

大学・大学院での教育を高度化するということは、学生たちの側から見れば「出口」が狭くなり、厳格に管理されるようになるということだ。

英文は金曜日のジャパン・ニースに掲載予定です